

藤田真一教授 略年譜

年くれぬままに何処へ

気がつけば、もう人生の半分以上を大学教員として過ごしてきました。最初は茨木市にある追手門学院大学、つぎに京都市の京都府立大学（女子短期大学部）、最後に吹田市の関西大学、という三つの大学に身を置きました。そのあいだに、授業をはじめとする学務はむろん、学会活動、講座や講演の依頼、また国文学研究資料館などさまざまな機関や所蔵家の古書・文献調査をこなし、さらに著作や論文・エッセーなどの執筆を続けてきました。

そして、昨年度（二〇一六年度）三月に定年退職を迎えました。あと三年は特別契約教授として関大に在籍することは可能だったのですが、本年度をもって身を引くことを決意いたしました。これを機に、これまで歩んできたあらましを書いて残すということが、関大国文学専修のならわしになっているそう

です。わが身のことを語るのははなはだ苦手なのですが、お勧めに従って、言うほどのこともない足跡を、とりとめもなく、想い出すままに書きとめることにしました。なお、年次などの時期はすべて精確というわけでもなく、あいまいな書き方をせざるをえない場合もありますこと、ご海容願いたく存じます。また年代は西暦を基本とし、折につけて和暦を併用することとします。

幼少期

一九四九年（昭和二十四年）八月二十七日、京都市右京区（現西京区）桂野里町に生まれる。阪急・桂駅のすぐ前の家です。父藤田良太郎（一九二一〜二〇一〇）、母喜代子（一九二五〜一九六九）。父は戦争中に海軍の航空隊に勤めた経験から、折

にふれて戦争のむごたらしさについて、憤りを込めて語って
ました。でも戦友が訪ねてくると、なつかしさのあまり、語り
明かすというほどでした。戦後は阪急電車の技術者として勤め
を全うしました。母は小学校の教員でしたが、結婚を機に身を
引きました。なお、わたくしの小学一年のときの担任矢代先生
は、かつての同僚だったということで、その奇遇に驚いていま
した（後年、先生の子息・子女の家庭教師をしました）。

それほど大きくない家ながら、祖父母に加えて、父の姉妹家
族がともに暮らしており、一時は十人を超える大家族でした。
嫁入りした母にとって気苦労は絶えなかつたでしょうが、子ど
もにとつていとこは兄弟同然で、楽しいものでした。今日でも
兄弟のように付き合っています。また、隣家の諸岡家も男三人
兄弟で、親しく交際を重ねていました。

小学校は桂小学校、桂駅の地下通路を「ありがとう」の掛け
声とともに通してもらって、通学していました。今でも記憶に
しみついているのは、土曜日ごとに図書館から本を借りてきて
は、週末に読み終えるというものです。本を読まないではいら
れないという習性は、そのころに身についたとおもわれます。
四年生から六年生までは、岸田信雄先生が担任で、厳しいなか
にも思いやりのある先生で、いまでも忘れられない教室風景が

いくつもあります。卒業後、中学校へあがるに際して、中高一
貫の私学を志す同級生が幾人かあって、互いに励まし、競争し
あつて勉強できたことは幸運な思い出です。

中学・高校時代

中学校は、京都の私立洛星中学（および高校）でした。
一九六二年（昭和三十七年）中学入学、一九六八年（昭和
四十三年）高校卒業。戦後に創立されたカトリック系の学校
で、われわれの学年は十一期生にあたります。母親がカトリッ
クだったこともあって、幼少期から教会には時どき行くことが
あつたので、ミッションスクールということに違和感はなく、
むしろ親しみを感じていました。

社会科でしたか、入試でこんな問題が出たことを今でも覚え
ています。「水」は人間にとつてたいへん役立つものである一
方、ときに大洪水などの大きな災難をもたらす、それと同様の
ものをあげて説明せよというものでした。そのとき、「原子力」
を取り上げて解答しました。もちろん広島・長崎の怖い災禍
は知っていましたが、発電などの有益な働きがあることを書こ
うとしたのです。でも、核兵器だけでなく、原発のさまざまな
問題を知るとなると、じぶんの答えについて今となつては

後悔されてなりません。

中学校には、オーケストラ・クラブがあり、小学二年生からヴァイオリンを習っていたので、すぐに入部しました。吹奏楽部のある学校は多いでしょうが、弦楽器が必要なオーケストラ部はかたんではありません。中・高いっしょにやれるから可能だったでしょう。先輩だけでなく、同級生にもうまい者は数多くいました。どう頑張ってもかなわないと思わされる一方、クラシック音楽の醍醐味についていつのまにか随分教えてもらうことができました。とくに合宿では、音楽だけでなく、今後の進路のことなども議論する機会がありました。

また、指揮者の小笠原義明先生がクラリネット奏者で、麻田・今井などといった同年年の友人四人が日曜日ごとに、先生のお宅へ習いにいっておりました。そのレッスンについて行ってお邪魔しては、遊びながら音楽の楽しさ、難しさをしぜんに身につけるようになりました。うちの数名とは、今でも親友として付き合っています。

学校は金閣寺のやや南の地にあり、ふだんは阪急と市電を利用して通学していましたが、京都の市中から通っている同級生もあり、ときに気が向くと、かれらといっしょに河原町方面まで歩いて帰ることがありました。碁盤の目状になっている街々

の交差点で、制服の帽子をほうりあげては、ツバの指し示す方向へ歩くなどという遊び半分の帰り方もしました。すると、思わず知らず、これまで歩いたことのない街路に向かうことがありました。こういうアソビをやったおかげでしょうか、京都を離れてからも、通りの名前を目にすると、ただちに「あの辺や」と思いを巡らすことができます。古典文学をやる者にとつて、京都の地図や風景が体内に宿っているようで、今となるとありがたいこととおもっています。何気ないアソビが、結果的に勉強になっていったということになります。

中高一貫校だったためでしょうか、中学三年にはもういくつかの科目で高校の課程に進むことになり、だんだん勉強が重荷になってきました。でも高校入試の心配がないせいで、気楽に過ごせたことも否めません。修学旅行はなく、その代わりに夏休みの補講終了後に、富士登山という旅行をやっていました。もちろん参加して、登山に挑みました。途中で落ちこぼれる生徒はほとんどなく、そればかりか頂上の「お鉢めぐり」まで経験することができました。江戸時代によく描かれた富士山図を見るたびに、十五歳で登った折の記憶がよみがえってきます。

修学旅行というと、高校では二年生のときに北海道旅行をおこないました。そのころ、北海道行きというのは大層なことだっ

たので、みんなで行けたのは幸いでした。後年、大学での親友が札幌勤務になったので単身遊びに出かけましたが、修学旅行の経験があったせいかな、不安を覚えることはありませんでした。

高二になると、そろそろ大学の進路を考えないといけなくなります。もう最初から文学部以外に選択肢はありませんでした。わたくしはどういうわけか、小学の四年生ころから、大学は文学部しかないと思います。それは積極的な考えからではなく、理数系科目を苦手としていたから、おのずから文系、なかでも文学部と心決めることになったのです。かといって国語がとりわけ得意という意識もなく、ともかく本を読んでもいられるといういい加減な気持ちからだったのでしよう。長年同居していた従兄の影響もあったかもしれませんが。

大学時代

大学入学はたやすいことではなく、紆余曲折を経たうえでやっとたどりついた始末です。

はじめの年は、京都大学文学部一本でした。模擬試験などでは、五分五分くらいの可能性でしたが、京大しか受験しませんでした。しかしみごとに不合格。でも、もとより一浪は織り込み済み、予備校では受験一辺倒の話ばかりでもなく、知的好奇

心を刺激してくれる先生もおり、親しい友人も同窓となつて、辛いながらも、それなりに充実した一年でした。

さて、いよいよ二回目の受験。となると、もう一本にしぼることはせずに、二期校はもちろん、私学も受けることにしました。浪人中に少しは学力もついたかで、評定もやや上がっていました。ところがです、ちょうど学生運動真っ盛りのころで、とくに一九六八年は運動が最高潮に達した年でした。ただ予想外だったのは、東大をはじめとする国立大学三校が入試を取りやめるといふ、前代未聞、予想だにしない事態が生じたことです。新聞やテレビで伝えられる学生たちの主張そのものは、共感できる面がないわけでもなく、かといって、そこまでやるのは如何なものか、と相半ばする気持ちで様子を見ていましたが、まさか入試中止というところまでは予想できませんでした。

でも、成り行きにはあらがえません、なんとかなるやろ、とみずからを気楽にみせかけるようにして、二回目の受験に挑みました。だが、結果は厳しいもので、第一志望校は不合格、二期校と私立のみの合格でした。そこで入学したのが、大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）のドイツ語科ということになりました。大阪といえばこれまで、梅田界隈にたまに出かけることはあっても、外大が位置する、市内でも谷町筋の南方付近

にはほとんどなじみがありませんでした。それでも通い始めると、知らない土地柄がかえって新鮮にみえ、あるいはいかにも大阪らしい光景に出くわして、それなりに楽しく、またドイツ語の勉強もまんざらではありませんでした。

ところが、入学すると間もなく、この大学でも学生運動の嵐が吹き荒れ、全学休講となつてしまいました。となると、家にいることが多くなつて、のんびんだらりとするうちに、とんでもないことが起りました。母が胃ガンに冒されているというのです。しかも手術のしようもないという。暇を持て余している身としては、入院先の市立病院へ毎日のように見舞いに出かけましたが、なすすべはありませんでした。そしておよそ一ヶ月後の七月十三日、四十三歳の若さで亡くなつてしまいました。長男のわたくしはやつと二十歳になる直前でした。ずつとあとになって、自分じしんが母親の年齢を越えたとき、こんなに若くして死んだのかと、ひそかに慨嘆を新たにしました。

それはさておき、外大にもあつたオーケストラ——といつても、小さい大学ですから、室内楽をやや大きくした程度の規模——に入部しました。中高のときよりずつと校則が緩やかで、練習はもちろん、雑談にも熱心で、ときを忘れて部活動に邁進しました。ここで出会つたのが、ホルンの柴田道雄さんでした。

二年先輩でしたが、同じドイツ語科、しかも甲陽学院という、洛星と似たような私立の中高一貫校卒だったこともあつて、じつにウマが良かったです。おまけに父君が阪大の英語教授で、お兄さんも阪大生、さらにご本人は驚くほどの物知り・分け知りの御仁で、温かな性格の持ち主でした。いつの間にか、柴田さんとはいつもいっしょにいるという間柄になりました。先取りして言うと、かれは卒業後、名古屋大学大学院でドイツ文学を学び、神戸商船大学のドイツ語教師として帰ってきました。ところが、四十過ぎにガンを発症して、あつという間に冥界へと行つてしまいました。見送つてから愕然としたのは、かれと過ぎた日々のが、すっかり模糊不明瞭なものに遠ざかつていて、杳然としないではいられませんでした。これを反省の機として、以来日記をつけることにしました。

ようやく授業が再開されてから、それなりに充実した日々が還つてきました。その一因は、学友たちとの再会でした。似たような失敗の経歴と、新しい学習への関心を共有していて、友は活気のあるものとなりました。とくに二十七人の同級生のうち、女子は三人のみ、つまりほとんど男子学生ばかりというクラスで（中高で馴れてはいましたが）、気兼ねをすることもなく、議論に花を咲かせることができました。

そして外国語の勉強をするうちに、なにやら疑念がもたげてきました。それは、外国のことを学び、知るのたいせつだが、日本についてもっと考える必要があるのではないかということでした。そこで同級生数人でしばしば研究室に行つては、先生方にいろいろと質問を投げかけたり、同席の先輩院生と議論を戦わしたりしました。そのうち、先生方も面倒におもうようになつてきたのか、徐々に応答が粗くなつてゆきました。ただ、牧祥三先生だけは若造の厄介な問いかけにも念入りに応じてくださいました。そして、伏見の先生のご自宅までおし寄せるようにもなりました(牧先生はのち学長に就任)。

やがて、じぶんたちで読書会を開いて勉強をしようということになり、木内・森島・山口・国松ら四、五名の面々が集まりました。もちろんドイツ語のテキストも読みましたが、それは授業でもやっていること、とくに日本のものを取り上げようという運びになりました。文学畑よりむしろ思想的な傾向に関心が向き、たとえば、空海の『三教四帰』や荻生徂徠の『弁名』、あるいは本居宣長の諸作など、時代を越えた難物に挑戦したこともあります。そのうち誰が言い出したのか、日本のことを理解する基本はやはり和歌だ、という話になりました。和歌をやるには覚えるに限るとして、『万葉集』二百首、『古今集』百首、『新

古今集』二百首などを、競争するように覚えあうことに挑戦しました。こういった体験が、しだいに日本文学をもっとやりたいという気持ちの芽生えにつながり、とうとうわれ一人ですが、国文学の大学院を目指すようになったのです。

とはいえ、外大ではやれないので、他の大学院の国文学科への進学を考える必要があります。でも、何の手がかりもありません。ところがたまたま、同様のコースを歩んだ先輩須田悦生さん(インド語科)の仲介によって、阪大の信多純一先生を紹介してくださったのです。そこで、阪大大学院の国語国文科を目標にすることにしました。

しかし、外大卒業後いきなり、なんの勉強もせずに大学院を受験するなどできるはずありません。ここでもまた、一年の浪人をするはめになりました。むろん院の受験前に、卒論を提出して、きちんと外大を卒業しておくことが前提です。しかも卒論はドイツ語で提出しないといけないのです。当然、まず日本語で書いて、それを独訳するという二重手間となります。そのうえ準備が遅れていて、とても締め切りに間に合いそうになり。そこで先生にこっそりお願いして、事務室へは日本語のものを提出して(表紙はドイツ語)、後日先生の手許でドイツ語の本文に差し替えてもらうという、反則のようなことをしでか

す始末。でもなんとか卒業はさせてもらえました（卒論の内容や標題などもう記憶のかなた）。

大学院時代

浪人とはいえ、大学浪人とはいささかようすが異なっています。予備校もなければ、受験参考書もない、だれかに教えるを乞いたいとおもっても、先生も知りあいてもない、そんなあてどのないなかで、無手勝流におもい定めたことが二つありました。第一は、くずし字の勉強をすること。大学院では近世のことをやりたいと望んでいたのに、いずれくずし文字が読めないと話にならないだろうと見究めたのです。まったく独学、くずし字辞典と首つ引きで、あてもなく影印本などのテキストをなぞっては練習しました。第二は、「源氏物語」を原文で全巻読んでみることです。注はないとどうにもなりません、現代語訳には頼らないことにしました。そこで家にあつた、日本古典文学大系本の「源氏物語」全五巻をわずかつ読み進めました。夏場、三か月はゆうにかかったとおもいますが、喫茶店に通いながら、なんとか読みとおすことができました（それ以後全巻通読はない）。

受験勉強ともいえない準備をした成果かどうか、ともかく翌

年、合格にこぎつきました。入学して早速、指導教官となる信多先生のもとへ参りました。すると先生は、「何をやりたいのかね」とお訊ねになりました。「俳諧をやるか、宣長をやるか、まだ迷っています」と答えると、即座に「俳諧をやるなら大谷さんのところへ行きなさい」と言われました。大谷篤藏先生です。お名前くらいは知っていましたが、もちろん詳細はまったく未知でした。月一回、当時の大阪女子大学で研究会を開いているということでしたので、とりあえず顔を出してみることにしました。それが、現在五百回を越えてなお続いている、「大阪俳文学研究会」です。出始めた当初は、先生方の顔も存じ上げず、話の内容もまったくくんぶんくんぶん、不安ばかりが募ってゆきました。でもなんとしてでも喰らいついてゆこうと、欠席することなく、出続けることにしました。

大学院では在生も新入生も、それほど多くないものですが、授業の顔ぶれはほぼ同じなので、すぐにそれぞれのキャリアや専門を承知して、互いに親しくなりました。そして時代や専門にかかわらず、いっしょに勉強してゆこうという雰囲気がありました。片岡利博・荻田清・杳名定君らが同級で、前後には松原秀江・黒木祥子・寺島樵一・大鹿薫久その他の諸兄姉がいっしょでした。やはり勉強会を開いて、研究を支えあいました。

なかでも年長の寺島さんは、専門が俳諧に近い連歌で、アメリカ留学を経験していることもあって、研究会もいっしょに出るようになり、また家族ぐるみで近しくさせてもらいました。かれは後期課程を済ませて、甲南大学に職を得ました。ところが、間もなく病に臥せってしまったのです。やはりガンでした。そして四十の歳をこえたところで亡くなってしまいました。アメリカ人の奥さまと娘ひとりを残して、逝ってしまったのです（奥さまのジェーンさんとは、今でもときどきメールでやりとりをする）。その後も、家内の高校の先輩でもある黒木さんもガンに冒され、あつという間に亡くなりました。どういいうわけか、わたくしの周辺では優秀な若手研究者諸氏が相繼いで、幽冥界を異にする悲哀に直面しました。

修士論文に取り掛かろうとするころ、田中先生の仲人で結婚を果たしました。相手は山本崇子と言います。まだ学生の身で大丈夫か、という不安感が実家ではあったとあとで聞きました。が、相手は会社勤めの身、「まあなんとかなるやろ」といった安直な気持ちで所帯をもちました。三年後には長男を得て、その後三年ごとにさらに二人の男児に恵まれました。三人とも今ではそれぞれに仕事をもち、家庭を営んでおります。

修論は、入学直後に先生から三年かけてやれと言われて、つ

い気楽に過ごしてしまつて、せっかくの猶子の一年も、余裕どころか、先の見通しが立たないまま過ぎてゆきました。でも、これはそれほど深刻に考えませんでした。なんといつても日本語で書けばよいので、なんとか変な手を使わずに提出することができました。もうこのころには、「蕪村」を研究テーマにすることに決めていました。大阪生まれで、後年は京都で活動し、烏丸に近いところで生涯を終えたという経歴から、その人生になつかしいものを感じたことも理由のひとつです。池大雅とやらんで、当時の文人画（南画）の頂点になるような絵画作品を残した俳人です。俳諧だけでなく、高邁かつ親しみのある絵画作品に曳かれたこともあります。

そしてなにより、蕪村の詠んだ俳句のすばらしさにうっとりさせられました。『郷愁の詩人と謝蕪村』の名著をしるした萩原朔太郎は、以前から大好きな詩人だったという影響もあったかとおもいます。俳諧、そして蕪村を研究する学生のためということだったのでしよう、東京教育大学の尾形仿先生を集中講義に呼んでいただいたのは、きっと信多先生のご配慮だったと推測しています。尾形先生とはその後も、『俳文学大辞典』（角川書店）や『蕪村全集』（講談社）といった、大きな企画に誘っていたかどうかという関係が続きました。

大学教員前期

ドクターコースに進学して二年余りがたつたころ、追手門学院大学に來ないかという話が舞い込んできました。阪大のあと勤めておられた、柿本奨先生を通じての話だったようです。田中・信多両先生の後押しもあって、一九七九年（昭和五十四年）四月、三十歳になる年に職を得ることが叶いました。阪急・石橋からスクールバスが出ていたので、通勤にはさして不便を感じませんでした。一般教養でしたが、好きなことをさせてもらった記憶があります。さらに五年目には、一年間の研修期間もいただきました。

大学の授業では、もちろん「蕪村」を取り上げました。しかしそのころ、まだ「蕪村」を扱うに適當なテキストがなく悩んでいました。そのことを耳にした上野洋三氏が、「じぶんできくつたらいい」と言つて、和泉書院の廣橋研三氏を紹介してくださいました。一年ほどして出来上がり、以後しばしばこれをテキストとして授業に使うようになりました。そしてなににより、本を作ることを要点を学ばせてもらったのは大きな経験でした。桜井武次郎氏のお声がかりで、研究会の場で、校正作業の方法を教えてもらったこともあります。

またこの期間に、蕪村と同時代の京都の漢詩人三宅嘯山につ

いての論文をようやく完成させることができました。嘯山については、院生のころからずっと関心をもつていながら、どうしても論文のかたちにはできないままでいたのです。その課題が阪大の雑誌『語文』において目の目を見たのです。現時点での自己評価は横に置いて、当時はそれなりの満足感がありました。そして、これを仕上げたことによつて、研究者としてこれからもやつてゆける自信めいたものを得たのです。もう三十五歳になつていました。

そして六年目にはいつてしばらくして、転職の話がもたらされました。京都府立大学に來ないかというものです。もう記憶は定かではありませんが、これも上野氏を介してのものだったとおもいます。上野氏もかつて京都府立大学に在職のころ親しくされた、笹川祥生氏から相談があり、推薦をしていただいたのだとおもいます。ただし、学部ではなく、笹川氏同様、短期大学部の国語科のほうだということでした。

この短大は、戦前の京都府立桂女子専門学校（いわゆる「桂女専」）の後身で、戦後もしばらく桂にありました。生家の裏の道が通学路のようになっていて、祖母などはよく、「女専」の学生さんはよくできる、と口癖のように言っていたのを覚えていました。のちに北区にある、学部のキャンパスのほうへ移

転したのです。

研修を終えて一年後というのはやや気が引けましたが、そろそろ専門的なことを教えたいという希望も芽生えてきたころだったので、その話ののることにしました。ただ、住んでいる宝塚から二時間以上かかるという、通勤時間が気になりました。でも、まだ若かったからでしょう、なんとかなるやろ、とあまり気にも留めずお受けすることにしました。あとで知ったことですが、ここには小学校の同級生がかつて何人も（四人？）在学していたことがあるというので、ふしぎな縁を感じました。国語科には中井和子先生、笹川祥生先生、紙谷栄治先生などがおられて、たいへん家族的な雰囲気でした。

府大に勤めはじめて間もなく、大学外の一般人や社会人にも開放している研修講座を担当することになりました。当初は蕪村をはじめとする江戸期の俳諧を取り上げて、ゼミのようなかたちで講座をもちました。そこには現役の高校教諭や、俳句の実作者の参加もありました。なかでも、俳人の岩城久治氏はもと教員で、しかも丹後の峰山高校時代は、従兄と同僚だったと聞いて、またしても縁の微妙みまよに得も言われぬ思いがしました。そのときいっしょに学んだ岩城氏をはじめ、岩井博之・村田（東条）明子氏らとは、現在に至るまでずっと交流が続いています。

またこの講座で、一般社会のひとと議論しながら勉強を進めるという、緊張感と面白さを知ることになりました。

府立大学に勤めはじめてしばらくしたころ、上野氏より一本の電話がありました。「相談事があるので、大谷先生の家に来てくれないか」というものでした。行ってみると、応接間で大谷先生を交えて三人で話をするようになりました。じつは以前から岩波文庫で『蕪村書簡集』を出すことになっているのだが、先生の体調が思わしくなく断念しようかと迷っていたら、とここで手伝ってもらってなんとか完成させられないか、というものでした。先生の作業は翻字がほぼ終わり、脚注と解説には手がつけられていない状態でした。となると、注と解説をやれ、という話になります。原稿をつくって、それを先生に御覧に入れて、修正を加えるという作業の繰り返しになります。これは大仕事です。語句の正確な意味から俳句を含む文脈の読解、さらには蕪村書簡の意義を解いたうえで解説文を作成するというものです。四百通を超える書簡（不掲載もあり）を読みとおし、意味をとって適切な注釈をつけるなんてはじめての経験、でも「お前がやらなければ文庫自体がもう出せない」と言われると、「承知しました」と言わないわけにはいきませんでした。

原稿を少しずつつくっては、先生のお宅に伺い、意見や指摘をもらって修正、書きなおすという作業をどれだけ続けたのか、もう記憶のあなたにありますか、なんとか原稿を完成して入稿、やがて校了のときがやってきました。この最終段階で先生は、校注者をふたりの名前、つまり「大谷篤蔵・藤田真一」にしようとおっしゃったのです。先生の手伝いとはかりおもっていたのが、共同編集にしようというのです。意外も意外、おもつてもみなかったことですが、先生のお勧めに従ってそのように計らってもらいました。ただ一言加えてこうおっしゃいました。「五十音順なら、オが先だからね」と。発したのは、「ハイ」という言葉だけでした。

この作業をするまでは、書簡はただの資料としか見ていなかったのが、蕪村の手紙は文章に味があって、それ自体が文学、だということに気づかされました。また、相手との距離感や用件の種類によって、文体や言いように変化があるものだと痛感しました。書簡文の難解さは否定できませんが、それを越えて、文学性や人間性を掘り起こす最高の材料だと身にしみて感じました。蕪村の手紙はそれだけの魅力をたたえているのです。

そのうちに、若草書房からこれまでの論文をまとめて、論文集を出版しないかという話をいただきました。なんとなく、い

ずれはとおもうところもあったので、その話にのることにして、一九九九年(平成十一年)七月に上梓することができました。「蕪村 俳諧遊心」と題しました。できたばかりの本を抱いて、田中・信多両先生のお宅に持参しました。田中先生は祝意として、自宅で御馳走してくださいました。信多先生は、表紙から裏表紙をぐるりと眺めて、一言、「藤田君、これで学位を申請しなさい」というお勧めを口にされました。まったく念頭になかった事態で、驚きを禁じえませんでした。でもそのお言葉に従って申請をして、阪大から学位をいただきました。大学院で学位を取得することになって、現代とは大違いといえましょう。このときのお勧めがなければ、いまだに学位なしのままだったかもしれません。この本に対しては、文部大臣賞の栄誉を得ました。

さて、ここで十数年がたったころ、学内のしくみを大きく変更する、内部改革の作業がはじまりました。議論を尽くした挙句、なんとか新しい体制ができた直後のことです、関西大学から、こちらに來ないかという話を頂戴しました。関大では俳諧の教員を配置する伝統があったらしく、少し前に乾裕幸氏が亡くなったので、その後任としてのお誘いでした。新体制直後の転任とは、いかにも不義理で面目ないことでしたが、いつかは大学院で授業をやってみたいというおもいに勝てず、後期(秋

学期)という年度途中ながら、転任の仕儀に至りました。京都府大には、今でもぬぐいきれない申し訳なきが消えませんが。

大学教員後期

二〇〇〇年(平成十二年)十月、京都府大の短大には迷惑をかけたままで、新しい勤め先に移り、内心忤怩たるものがありました。でも、来てみると、それだけのことはありました。まず国語国文学科で十二名もの教員がいる、大学院生はかなりハイレベルの研究をしている、図書館は予想以上に充実している、その他さまざまなことがこれまでと異なり、新鮮に感じられました。図書館には基本的な新旧の研究図書がそろっているだけでなく、思いがけない和本を見かけることもありました。新刊書のみならず、しばしば古書目録に出ている書物を、希望すれば購入していただけたのもすばらしいことでした。

また、赴任して三年目には、一年の研修をいただき、天理図書館をはじめ、あちこちの図書館に出かけては、種々の和本を閲覧できたことも大いに勉強になりました。もともと古書や江戸期の資料を収集するというタイプではなかっただけに、却ってこの期間に貴重な原資料に触れられたのは得がたい経験となりました。

ただ、受け持ち科目が多いのと、何科目かの受講生がやたら多いのには閉口しましたが、これはやむを得ないこととあきらめました。

それに残念なことといえば、俳諧に関心を持って、卒論やゼミを志望する学生の少なかったことです。俳諧に関する卒論のテーマにかかる学生も、ほとんどいない状態でした。そもそも俳諧には興味を持っていないのか(現に学部時代のオノレがそうでした)、授業内容がお粗末なのか、日本文学にはもっと魅惑的なジャンルが多くあるからなのか、理由は単純ではないでしょう。ただ、世界の文学を見渡して、俳諧ほど単純そうにみえながら、高度で、奥行きのある詩はほかにないでしょう。また、日本の気候・風土に根ざしているとともに、グローバルに共感を呼ぶ詩歌も珍しいでしょう。芭蕉のように、哲学的とさえいえる言葉をのこした人物もあって、ものを深く考える対象としてもうってつけです。

大学院でも、一時は一、二名のわずかの受講生で演習をやらないといけない時期もありました。でもここ十年近くは、正規の大学院生以外に、すでに単位取得済みの院生、聴講生など、つねに十名をこえる受講生が集まり、俳諧やその他の近世文学を素材に議論盛んに勉強をしています。実社会でさまざまな経

験を積んできたひとあつて、多彩な顔ぶれで、学生たちはいい刺激を受けているようです。また実作者の参加もあり、誘われて、句作に励む学生も出てくるほどです。俳諧・俳句は日本文学の誇り、と考えてくれる学生がいつそう出てきてくれることを念じています。

関大にきてよかったことのひとつは、自前の専門学術雑誌『国文学』があることです。それまでは同様のものが学内になく、論文原稿を書き上げても、掲載してもらえない場を求める必要がありました。論文が書けなくなったら研究者人生は終わりと自戒しているだけに、この『国文学』に出せる原稿を、年に一本は用意するというのをノルマとしてきました。ほかから求められる仕事もあつて、すべての年にわたつてというわけにはいきませんが、励みであり、責任でもあつたとおもい、ほぼ毎年提出できるように努めてきました。来年度からどうすればよいか、迷いにさいなまれることになるでしょう。

関大に移つてから、しだいに俳句の実作者との交際もふえてきました。糸口は紫^{しむ}薇^びの会のみなさんでした。親好あつい桜井さんの紹介で、「行くときよい」と勧められたのです。主宰は瀧谷道さん、そこに橋間石・茨木和生・岩城久治・大石悦子・正木ゆう子さんら、錚々たる顔ぶれの集まりでした。俳句作りの

話から、学問的な事柄まで、たいへんはば広い話題があつて、なんの気兼ねもなく過ごさせてもらいました。そのうちに、瀧谷さんから主宰誌の『紫薇』に原稿を書いてほしい、とくに蕪村のことを、と依頼がありました。そこで毎号、数枚ずつのエッセー風の短文を寄せることになりました。

ところが、話はこれで終わりませんでした。この情報を得られた岩波書店の旧知の編集者吉田裕氏から、『紫薇』に書いてきたことをもとにして、本を作りませんかというお誘いがあったのです。気楽に書いていた随筆が、数百頁の本にできるのか半信半疑でしたが、なんとか頑張つてみよう、と、本腰を入れて執筆をはじめました。そしてできあがったのが、『蕪村余響』(二〇一一年二月刊)です。この本にはおまけまで付けてきました。山梨文学館から「やまなし文学賞」を授与するということもでした。堅苦しい〈論文〉ばかり書くのが能ではないと思ひ切つたことです。

また二〇〇八年には、滋賀県のMIHO MUSEUMで「蕪村余響」が開催されることになり、その準備のために、打ち合わせに来てほしいという依頼がきました。行つてみると、館長の辻惟雄先生をはじめ、近世美術史のすごい専門家が顔を揃えておられました。文学畑はわたくしだけ、なんでも辻館長か

ら、俳諧の藤田も加えるように、という指示があったとのこと
です。会合ののち、しばらくして解説の分担執筆の下命が参り
ました。かなりの分量の原稿を書いたようにおもいますが、苦
労というよりむしろ楽しみながら作業にいそしんだことを覚え
ています。その図録は図版がじつによくできていて、事あるこ
とにひもといっております。

さらに、その四年後、こんどは別冊太陽で『与謝蕪村』を出
すから、編集の手伝いをするように平凡社から連絡がありまし
た。打ち合わせを重ねたり、取材に同伴したり、原稿を書いた
りと、これも相應の労力を費やしましたが、充実した、見るだ
けでも楽しい冊子ができ上がりました。さすが老舗の出版社だ
けのことはあるという印象をつよくなりました。

さらに、この期間で忘れられないのは、京都の元揚屋角屋を
会場にして俳句会を開催したことです。蕪村の命日（十二月
二十五日）ころに、全国的に活動している、一線級の俳人に来
てもらって句会を催すというものです。「蕪村忌」大俳句会と
銘打って、蕪村を追悼するとともに、結社や流派を越えた句
会にしたいと考えたのです。じぶん独りの発意です。まず角屋
の中川清生理事長に趣旨を話すと、即座に賛意を示してくださ
いました。さらに、懇意の澁谷道・大石悦子・茨木和生・岩城

久治の四氏に相談すると、ここでも賛同をいただきました。で
も、出演料がないのはもちろん、交通費・宿泊費すら自己負担
という厚かましい句会です。こんなムシのいい話に乗って下さ
る全国各地の俳人さんがどれだけののか、当初は不安だらけ
の船出でした。

ところが開けてびっくり、茨木さんが声をかけられた十名余
りの俳人さんが参加を承知してくださいました。そしてこの模
様を、角川書店発行の『俳句研究』に掲載してもらえることにな
ったのです（のちに『俳句』誌）。これが効果的だったのではよ
う、毎年十四、五名の方の参加をみることもできました。他に
「蕪村」の名を冠した句会がなかったからでもあったでしょう。
ときにNHKや新聞で報道されることもありました。句会のあ
とは、祇園などの料亭で二次会を催しました。みなさん、晴々
とやり遂げた満足感とともに、京の料理を堪能されていました。
こんな贅沢なことができたのも、現代の実作者とのつながりが
あったからこそと感謝しています。ただこの会は、生誕三百年
にあたる二〇一六年（平成二十八年）十二月二十三日、第十二
回をもって最後といたしました。でも、これと並行するように、
丹後の与謝野町がやはり「蕪村」を冠した句会を実施するよう
になったのは、発案した者としてはうれしい限りです。

いずれにしても、こうした催しを通じて、現代に活躍する実作者との交流がふえたことは得がたい経験となりました。俳諧が時代の変遷とともに、さまざまな苦節を経ながらも、四百年ものあいだ存続してきた理由と意義を考え、あわせて生きた俳句の空気を吸うのいうってつけのものとなりました。

大学外の活動

一、学会

学会は、大学院入学直後から、日本近世文学会と俳文学会に属してきました。両学会とも、ずっとほとんど出席してきたのですが、近世文学会については、ここしばらく欠席続きです。というのは、二〇〇九年から三年間、俳文学会の事務局を任されることになったからです。ほぼ毎日のように事務作業があり、大会や学会誌発行などの折には、とくに注意をしなくてはならず、時間的にも気分的にも、無理を押しつめて近世学会に出席する気にはなれませんでした。その流れで、今もほとんど出席できていません。ただ、近世学会では、学会誌『近世文芸』の編集委員を一期、また学会委員も務めたことがあります。俳文学会では、事務局のほか、やはり学会誌『連歌俳諧研究』の編集委員を経験したことがあります。さらに、常任委員について

は、現在も引き続き務めています。

二、研究会

先述したように、「大阪俳文学研究会」は大学院に入ってから参加し、ほとんど休むことなく出席してきました。その間、堺市にあった大阪女子大学からいくつか会場の変遷があり、現在は伊丹市の柿衛文庫でおこなわれています。そして二〇一七年三月には五百回記念の会を実施、また『会報』（現在は『俳文学報』と改称）は五十号を重ねました。関西一円の俳諧研究者はこの会で修練してきましたのです。そして、大谷先生をはじめ、島居清・富山奏・石川真弘・島津忠夫・桜井武次郎・雲英末雄・岡本勝・上野洋三などといった、学界を代表する諸先生方とともに、緊張感をもって俳諧研究に邁進する一方、和やかで快適なときを過ごしました。でも現今では、多くの先生方が亡くなられ、また若手は全国各地に散らばる傾向にあり、以前ほどの活気が見られなくなりました。残念であると同時に、責任を痛感しているところです。

このほか、中村幸彦・水田紀久・肥田耕三などの先生らと小さい読書会を催して、多くのことを学ばせてもらいました。

三、調査

最初の就職をしてからはほどなく、さまざまな調査に参加する

ようになりました。

もっとも長くかかっているのは、国文学研究資料館の委嘱による調査です。伊賀の芭蕉翁記念館や滋賀県の夢望庵文庫(乾憲雄氏所蔵)をはじめ、現在にいたるまでさまざまな文庫の書籍類の調査に携わってきました。

大阪府立中之島図書館や大阪城内の資料の調査を大谷先生らとおこなったこともあり、また淡路島洲本の由良町で、中村幸彦先生ご所蔵本の調査に数年かけて参加したこともあり(現関大図書館中村文庫)。ここでは先生の学者としての気高さ、人間味あふれる懐の深さに触れることができました。

さらに、これも大谷先生の手伝いとして、京都・鳥原の角屋もてなしの美術館所蔵の図録を作成するのにあわせて、蔵書調査をおこないました。それ以来、角屋との縁は現在までも継続しています。

その他、短期間または小規模な文庫の調査は、折につけておこなってきました。

四、朝日カルチャーセンター(大阪中之島教室)

前任校時代の一九九五年十月から、月二回のペースで開く講座を引き受けました。おもに「蕪村」の話をしてきましたが、ときに芭蕉その他の俳人をテーマとすることもありました。こ

こでは五年以上、ひとよっては十年以上続けて来ておられる受講者があるので、大学での授業のように同じテーマを繰り返かえし話すわけにもいかず、ほとんど作品や話題をかえて講座を展開してゆく必要がありました。そのため、新しいテーマを発掘することによって、必然的にこれまで取り上げなかったような未知・未開拓の話をせざるをえませんでした。精神的に大儀な任務でありましたが、そのことが結果的に、新しい研究に結び付いていったことは否めません。なお、今年度からは月一回のペースとなりました。

五、その他の委員

- 1、(財)角屋もてなしの美術保存会常任委員
 - 2、芭蕉翁顕彰会相談役(伊賀市)
 - 3、与謝野町歴史文化基本構想策定相談役
- #### 六、非常勤講師(年次不記入)

- 1、金蘭女子短期大学
- 2、甲南女子大学
- 3、大阪大学
- 4、同志社大学

くり返しになりますが、六十七で定年退職を迎えたものの、

七十までは特別契約教員として続けることもできたのですが、思い切って二年早い本年度をもって、関西大学を去ることにいたしました。残りの人生でできることはやっておきたいという、わがままから出た行動ながら、お許しただいて深く感謝申しあげるしだいです。といつても、あとわずかの人生で何ができるか、知れたものではありませんが、当面はやりさしになつてゐる仕事を成就することにとめます。

ここまで不合格や浪人や、また初志をまげて転科するなど、けつしてひとに語るほどの人生とはいえませんが、逆にかかる迷走があつたからこそ、それなりにやつてこられたともいえるでしょう。

ただ心残りは、本文でもふれましたが、現在いっしょに勉強している大学院生や聴講生との授業のことで、楽しくもあり、また張り合いもあつて、受講者たちも励みにももつていて信じています。それなりの場さえ確保できたら、協学をほつぽつとでも続けてゆきたいものです。「連衆」とともに学んでいけることを、生涯の生きがいとしたいと念じつつ、拙い文章を縮めたいとおもいます。ありがとうございます。